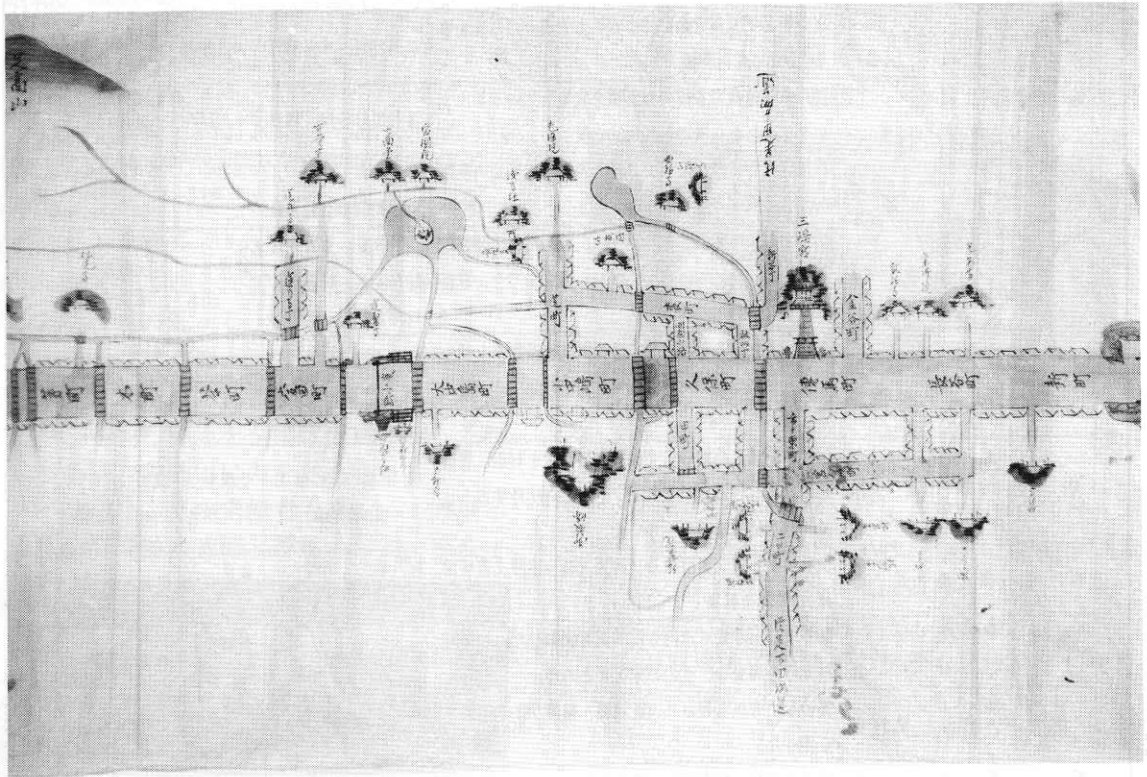


# 郷土館だより

Vol. 9 No.3

1987. 3. 25



三島宿街道絵図

## 目次

昭和61年度 郷土館事業報告	1・2
李王世子殿下と三島	3・4
伊豆の津島系天王信仰について	5・6・7
刊行図書紹介 他	7

## 昭和61年度 郷土館事業報告

	事業名	事業内容	実施日	入館者数	備考
展示	常設 ふるさとの自然と民俗 および三島の歴史	伊豆の化石、民具、三島暦、三四呂人形、農・商家の復元ほか(石器時代から江戸時代)			
	企画展・三島の埋蔵文化財展 「三島のあけぼの」	市内から出土した石器時代から古墳時代までの埋蔵文化財を展示(石器、土器、須恵器他)	4月25日～7月13日	10,949人	借用先 三嶋大社他 図録作成
	別 富士山写真展	アマチュア写真家撮影による「富士山」の写真を募集し、100点を展示。	7月25日～8月31日	9,176人	出品者 25名
	企画展 「お弁当箱展」	江戸・明治期の各種の弁当箱を収集している井出コレクションから借用して約50点展示。	9月21日～10月19日	6,317人	借用先 井出 孝氏 パンフレット作製
示	企画展 「東嶺禪師展」	沢地龍沢寺の開山に尽力された名僧東嶺禪師の墨跡60点、消息20点を展示した。	12月20日～ 昭和62年2月8日	6,384人	借用先: 龍沢寺、松蔭寺、輪仙寺、武川家他 図録作製
教育普及	歴史研究会	「後北条氏の盛衰」をテーマに、戦国時代の関東の雄、後北条氏について、草創から滅亡までを、豊富な資料に基いて、講義された。	7日5日、9月6日 10月4日、11月1日 12月6日	会員 80名	講師 日大教授 藏並省自氏 実方寿義氏
	夏の郷土学習会 「古代の人々の生活」	小学校4年～6年生を対象に、縄文土器作りを通して、三島の歴史に対する理解を深めた。	6月29日、7月25日 7月30日、8月22日	参加 30名	講師 三島南中校長 斉藤 宏氏 指導 郷土館学芸員
	古文書講座	60年度開講した初級古文書講座終了者を対象に実施した。木村吉茂「伊豆日記」を講読。野外学習として箱根旧道(東坂)を歩いた。	毎月第3土曜日 (12回開講)	受講生 28名	講師 辻 真澄氏
	古文書読習会	会員による古文書解読及び研究(樋口本陣文書解読研究、本陣史料集として刊行)	毎月第二、第四 土曜日	会員 30名	
	歴史研究会 分科会	60年度に引き続き市内寺院調査を実施した。加屋町林光寺を調査し、その結果をまとめた。	7月22日	参加者 17名	話者 林光寺住職 林 昌彦師
	「おかざり作り」講習会	縄のない方から教わり、辻連縄・輪飾り・玄閏飾りを作った。	12月14日	受講者 21名	講師 芹沢貫一氏
出版	郷土館だより	年3回発行、館広報及び調査報告等	7月、12月、3月		無料
	企画展に伴う出版	(1)「三島のあけぼの」図録 (2)「お弁当箱展」パンフレット (3)「東嶺禪師展」図録	4月 9月 12月		500円 無料 800円
	本陣文書史料集の発行	「三島宿 本陣家史料集」(3)の刊行	62年3月		1,700円
	郷土館のしおり	「郷土館のしおり」を改訂	62年3月		無料
収集	郷土資料の収集	(1)日常的な収集活動 (2)企画展に伴う収集			
保管	収蔵品の整理及び 収蔵庫のくん蒸	(1) 2.3階の民具資料の整理・台帳作製 (2) 3階収蔵庫のくん蒸	7月～8月 9月8日～10日		アルバイト傭い入れ 業者依託

## 郷土館入館者 61年4月～62年2月

月	月別合計(人)	月	月別合計(人)
61年 4	4, 7 4 3	10	6, 2 1 8
5	4, 6 9 6	11	7, 2 2 5
6	3, 8 1 3	12	2, 6 5 2
7	3, 8 7 9	62年 1	4, 5 1 9
8	7, 5 9 1	2	4, 6 7 0
9	4, 6 8 5	計	5 4, 5 9 1



東嶺禪師展開会式  
昭和61年度 郷土館の事業について

本年度は、企画展に、好評をいただく事ができました。

「東嶺禪師展」におきましては、沢地の龍沢寺、沼津市原の松蔭寺、滋賀県の齡仙寺、岐阜県下呂の武川家、及び三島市近郊の壇信徒の皆様のお蔭をもちまして、貴重な遺墨を数多く展示することができました。皆様のご協力に心よりお礼申し上げます。

東嶺禪師は「東嶺あつての白隠、白隠あつての東嶺」と讃辞されますように、白隠禪師とともに、その禅風を全国に広められ、三島の名刹龍沢寺の開山に力を尽くされました。

今回は遠方よりの来館者も多く、この展示により東嶺禪師の威徳・禅風の一端に触れて



夏の郷土学習会—縄文土器作り

いただけたかと思えます。

「三島のあけぼの展」では、未公開の石器・土器・須恵器等を展示いたしました。箱根西麓から出土した県内最古の石器(約2万7千年前)に、郷土の歴史の古さを感じていただけたと思えます。

「富士山写真展」では、アマチュアとは思えない秀作がそろい、来館者に好評でした。

講座関係では、3年目を迎えた「歴史研究会」が、日本大学三島学園のご協力を賜わり、蔵並先生及び実方先生に、伊豆と深い関わりを持つ後北条氏について、興味深い講義をして

いただきました。

古文書読習会の皆様には、ここ数年樋口本陣家史料の解読作業をお願いしております。本年度は、その史料集(3)を刊行いたしました。会員の皆様の地道な努力のおかげで、江戸時代の三島宿・本陣が序々に解明されつつあります。

古文書講座の受講生も2年目を迎え、実力をつけました。62年度は、実践的な古文書を解読する予定です。(写真)

講座関係は、62年度にはさらに発展させ、「郷土館友の会」を組織し、会員の自主的運営



古文書講座

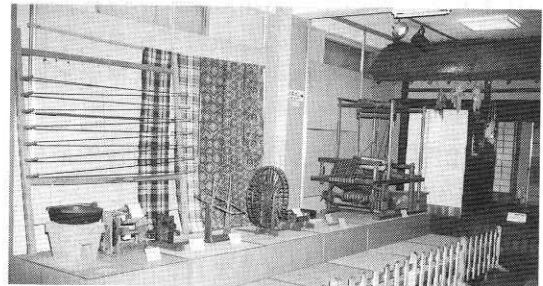
に委ねていきたいと考えております。

企画展、テーマ展も、4月下旬より「灯り展」を計画しております。続いて「新聞展」「伊豆の風景写真展」「東海道浮世絵展」「三島暦と時計展」の企画を考えております。

なお収蔵庫の民具類の整理もほぼ終了しましたが、狭あいのため、新たな収蔵スペースがほとんどありません。郷土資料の収集・保管という郷土館の使命を考えますと、収蔵庫の問題を何とか解決したいと検討しております。

今後とも、市民の皆様のご生涯学習の場として郷土館を利用していただければ幸いです。

(館長 永沼朋康)



2階展示場

# 李王世子殿下と三島

## (楽寿園の歴史3)

かつて楽寿園の地が、李王世子(=皇太子) 垠殿下の別邸であった頃を知る人はもう少数になってしまった。

楽寿園及び庭園を建造された小松宮彰仁親王が、明治36年に亡くなられた後、明治44年垠殿下の別邸となる。当時昌徳宮と記載されていたようである。(地図)(京城=ソウルにある李朝の王宮も又昌徳宮である。)

昭和2年に緒明氏に買却されるまでの約15年間、何回かおいでになったようであるが、詳しい記録は残っていない。

李氏朝鮮最後の皇太子として、幼小の頃日本に連れて来られて以来、祖国と日本との間の板ばさみになる苦悩に満ちた生涯を送られる。

三島に縁のある皇族として、李垠殿下の生涯を簡単に紹介しよう。



▲大正8年発行 三島町 地図

### (1) 李王世子垠殿下の生涯

李垠殿下は、500年続いた李氏朝鮮第26代高宗皇帝の子として、明治30年(1897)誕生する。日清戦争以来、日本は朝鮮半島への侵攻を深めようとしていた。

日露戦争後、明治40年2月父高宗皇帝の日本勢力追い落とし工作が表面化し、退位に追い込まれる。続いて、兄拓殿下が第27代純宗皇帝に即位される。この時垠殿下が皇太子に立てられ、将来は第28代皇帝となる予定であった。

同年12月に11歳で、日本留学の名目で来日される。実質的な人質である。しかし、その扱いは「皇太子と同等に」という方針で、陸軍幼年学校、陸軍大学へ進まれ、「日本人化」の教育がなされた。こうして、祖国や父母から離され、以来50年間日本の皇族として生き

ることになる。

明治43年8月23日、韓国併合の調印の後、朝鮮総督府が設置される。李氏朝鮮の終焉である。日本政府は、民衆の日本人同化策を進める中で、李王朝に日本人の血を入れる事を画策する。大正8年父高宗が死亡(毒殺説が強い)。翌9年4月、梨本宮方子姫とご結婚。日鮮融和のシンボルとされる。(写真①)



①ご成婚写真  
死亡(毒殺説が強い)。翌9年4月、梨本宮方子姫とご結婚。日鮮融和のシンボルとされる。(写真①)

家庭の安らぎを得られたのも束の間、翌年誕生された長男を早く失う。朝鮮民衆を思いながらも、自由がない生活の中で、陸軍軍人の道を歩まれる。

第二次大戦後、日本の支配から解放されたものの、朝鮮半島は南北に分かれて独立する。

李王朝の正統な王位継承者である殿下は、政治的に利用され無用な混乱を起こす事は避けたいと、日本に留まる決意をされる。昭和38年大韓民国へ夫妻で帰国され、45年薨去される。朝鮮民衆と日本のかけ橋の一生であった。

殿下の生涯については李方子夫人著「流れのままに」(啓友社、昭和59年)に詳しい。

### (2) 三島滞在

李方子夫人の母梨本伊都子さんが、その著「三代の天皇と私」(講談社、昭和50年)で、三島に滞在されたことに触れている。

大正11年5月、李世子夫妻が、生後8ヶ月の昔殿下を連れて京城(ソウル)に帰国され、日本に戻る前日、消化不良で死亡する。毒物死とも言われた。複雑な李王朝の対立抗争の犠牲者といえよう。夫妻の落胆は大きかった。

この夏、夫妻とともに、梨本夫人も、三島に来られ、滞在される。本文から引用する。

「夏には休暇をとり、両殿下には三島の別邸にお出掛になりました。私たちが大磯から足を伸して訪ねました。富士山の白雪が解け、その水が湧き出るといふ天然の池、その水は



氷のように冷たく心地のよいものでした。

日ざかりも吹く風すすし池水の  
こほりのことき上をすき来て

私たちが三日間お邪魔をし、のんびりと過したのです。心の中にこびりついた悩みはなかなか取れるものではありませんが、だんだんとそれが消えるように祈るのです」

### (3) 李根殿下をしのぶもの

李王世子の別邸になった時、現在ホールと呼ばれている部屋が増築された。異国情緒漂う部屋であったらしいが、戦後、米軍に建物を接収された際、ペンキが塗られダンスホールとして使用された。

李根殿下が残された物は少なく、楽寿の間に飾られている青磁の壺、庭園内に建つ朝鮮燈籠・大理石の燈籠(写真③④⑤⑥)などが、朝鮮半島から持ってきたとも、献上されたとも伝えられている。

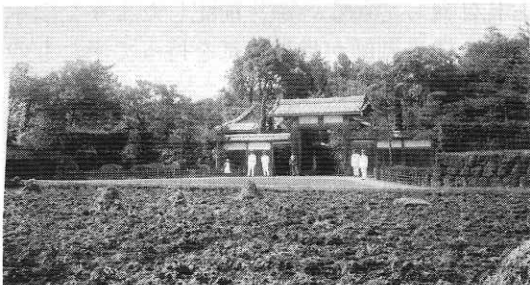
当時の李王家の警固は厳しく、市民がその生活ぶりをかい間みる機会はほとんどなかったらしい。

しかし昭和52年に、李王世子殿下をしのんで、芝本町の鈴木東語氏(明治38年～昭和61年)が手紙を下された。

「明治42年と思います。(注 大正の初期か筆者)三島の町に電燈がなく、夕暮ランプのホヤを掃除するのが私の日課でした。

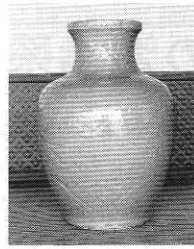
当時は現在蓮沼川の上流を宮さんの川と云って夏は我等子供のよき遊場でした。土手にあふれる程満々と川一杯に流れる清流は冷たく、石橋をひたしていました。今は見る影もありませんが、芝町の子供達のよき遊び場で2～30人の河童が日中にぎわっていました。

当時柵内に云伝えによると日露戦争の戦利

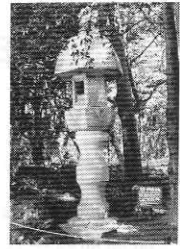


②李王世子殿下別邸 門

(本覚寺の東にあった。昭和27年妙行寺(日の出町)に移された)



③青磁壺



④大理石燈籠



⑤朝鮮燈籠



⑥朝鮮燈籠

品とか云れる丸い洋風の展望台の様な建物がありました。其の台の二階に李王世子殿下が、私達河童の泳ぎをニコニコ顔で眺めていました。盛夏なのに軍帽・軍服姿で御年は二十才前位と思はれます。長五尺五・六寸、肉付のよい小ぶとり型で、立派な体格でした。角張た紅顔に気品がありました。

泳ぎ上手の小河童は石橋と柵をもぐり殿下の御立ちになる展望台下の泳を御見せしました。殿下の笑顔を思ひ出します。

現在は橋の東西に十米位小浜石でつんだ石垣丈が60数年<sup>だけ</sup>前の面影を残しています。李王世子殿下の面影なつかしく思われます。子供心にも、のびのびした夏の一日の水遊びでした」

清流豊かなのどかな田舎で、むじゃ気に泳ぐ子供達を、根殿下はどのような気持ちで眺めていたのであろうか。

### (4) 三島別邸の売却

大正末頃より、李王家は、三島別邸を売却する計画を立てた。昭和2年に夫妻で世界一周旅行する費用捻出のためといわれている。

当時の三島町では購入することができず、谷田に住んでいた緒明圭造翁が、東海の名園が分割されるのを悔しまれ、一括購入される。昭和2年当時の金額で100万円といわれている。現在の約10億円にあたろうか。

現在の楽寿園が、ほぼ建造当時の姿を残しているのも、翁に負う所が大きいと言えよう。

(福田淑子)



疫病が流行する夏に天王祭を盛大に催している。

ところが、各地区のお天王様を詳細に調査してみると、同じ牛頭天王でも祇園八坂神社系と津島神社系との二種神が入っていることが判る。三島中郷地区を例にとると、梅名・安久が津島系、中島・大場・間宮（函南町）が祇園系である。このことは、ここら一帯が両神社系の布教の接点であったためと言えるであろうか。

各地の牛頭天王がいずれの系統であったにせよ、一度ムラに入り込んでしまうと、その祭りの形態は何処でも余り変らないものになってしまう。いわゆる農村の夏祭りという形で、地域化された年中行事となる。

次に、一例として、中郷梅名地区の「お天王さん」を紹介しておこう。

## 梅名のお天王さん

中郷の稲作地域では、夏の「お天王さん」は重要な年中行事で、盛大に祝う。田植えが済み、マンガアライ（馬鋤洗い）が終わると祭りの準備が本格的に始められる。

一年間格納してあったお天王さんのほこらを出して、川で洗う。汚れを落としてきれいなほこらに、という意味も有ろうが、この時に神を迎え入れるのかも知れない。次に、ほこらをこし台に取付け、用意しておいた縄をまきつける。コゼナワ（細い縄）数十条をほこらの内体に、コゼナワをより合せた荒縄をほこらの全体に碁盤の目のように巻く。仕上げは棟木を八の字（カンザシ）に絡げ上げる。巻方はムラによって異なるが、おのおのが縄の量の多さを競い合ったものだと聞いた。昔は、縄を集めるのは子供達の役割だったと言う。

出神祭は、夕方より右内神社神前で、ムラ役、当番組、子供達が集まって行われる。神主の祝詞の後、子供のお天王さん（おみこし）が発発する。前後を提灯を持った子供達にかこまれて「ヨッショイ ワッショイ」の掛声と共に、ムラ中を回る。子供みこしは途中で青年達に引継がれる。荒みこしとなる。ムラ内の田（田植えが済んだばかりの）になだれこむ、予め決めてあった家に寄り、みこしの

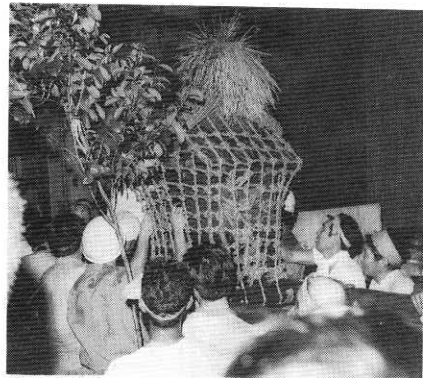
勢いはその度に盛上がる。「ウウ ウワハイ」の掛声と共に、お天王さんを高く持上げる。ムラを一回りした後、みこしは、梅名橋より川になげこまれ、そこで最後のもみ合いをしてクライマックスを迎える。川から引上げられたお天王さんは、がんじがらめの縄を刃物を使わずに石で切り解かれ、涼神殿に安置されて、祭りは一応の終わりをみる。

祭礼の次の日より一週間、社前の涼神殿前で、老婦人達が祈禱を続ける。「オハラ レイシャ ゴズテンノウ セイガン ズイキョウ エンメイ ショウジン ソワカ」太鼓のテンポに合わせて、毎夜二百～三百回の祈りがつづく。七月十四日、太鼓の音を合図に、子供達にお菓子が配られて、お天王さんは社殿に帰る。

（次ページへ続く）



お天王さんの祠に縄をかける



祭りのクライマックス

## 梅名の除疫神札

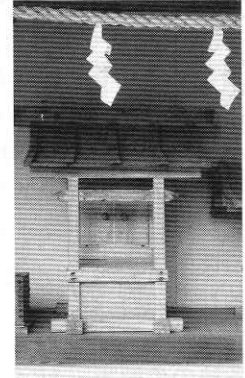
梅名の郷土史研究家、朝立和作さんによると、昭和の初めころまで、津島からもらったお札を青竹の先端に差してムラ境に立てた、という。津島札がツジギリ札として使われていたのであろう。現在はやらなくなったそうだが、昔の札を真似て作ったものを所有されていたので、見せていただいた。それは右のようなものである。

(杉村 齊)

普天の下卒士の浜王土にあらざるなし  
汝疫神速やかに立去るべし若し去らざる  
に於いては津島牛頭天王に奏して刑罰せ  
しむべきもの也 疫神共え

無病 授福

王子



梅名のお天王様の祠

### 〈刊行図書紹介〉

#### 「東嶺禪師展」図録

「東嶺禪師展」を、12月21日から2月8日までの間、開催しております。これに伴い図録を刊行いたしました。郷土理解のために多くの皆様に御活用いただければ幸いです。

- (1)書名 「東嶺禪師展」
- (2)頒価 800円
- (3)問い合わせ TEL0559-71-8228

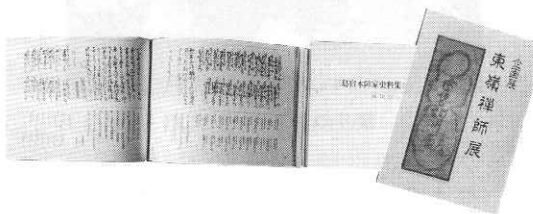
#### 三島宿本陣家史料集(3)

昭和60年度刊行の三島宿本陣家史料集(2)に次いで、本年度その(3)を刊行いたしました。なお、原文書の解説には、第2集に続き第3集も「郷土館三島古文書読習会」の会員が当り当館が編集しました。

本刊も、ぜひ購入されて御活用いただければ幸いに存じます。

- (1)書名 「三島宿本陣家史料集(3)」  
慶応二年御用留、天保四年当用帳
- (2)編集 三島市郷土館
- (3)頒価 1700円
- (4)規格 B5判・横開・函入
- (5)問い合わせ TEL0559-71-8228

(三島市郷土館)



### 郷土館 催事案内

#### 「あかり展」の開催

人間が文化的生活を送る上に欠かせないあかり。祖先たちは、さまざまなあかりの道具を発明し、工夫をこらしてきた。昔からのあかりの道具を、集め、展示してみたい。

会期 4月下旬～6月中旬

#### 表紙写真解説

#### 三島宿街道絵図

絵図作成年代は不詳。新町から萱町(加屋町)までの各町名と脇道沿いの町名が読みとれる。寺院名の中には、今は無い七面堂、宝国院、愛染院等が見える。街道にかかる橋の多いのも特色であろう。

### 利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月7日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)

### 郷土館だより No.27

昭和62年3月25日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館  
住所 〒411 三島市一番町19-3  
(楽寿園内)  
発行 TEL 0559-71-8228  
三島市教育委員会